

## 第3回 社会教育委員会議 議事概要

### 1 議事

#### (1) 協議事項

今年度テーマ「地域学校協働活動をととした地域づくり」について

#### (2) 連絡事項

### 2 日時

令和7年(2025年)1月23日(木) 10時00分～12時00分

### 3 場所

S T V北2条ビル4階 委員会会議室

### 4 出席者

#### (1) 委員(出席10名)

出口議長、片岡副議長、小田島委員、小野寺委員、高原委員、  
松岡委員、今泉委員、安田委員、臼井委員、榊委員

#### (2) 事務局(7名)

井上生涯学習部長、大瀬生涯学習推進課長、  
釜石社会教育担当係長、中原職員、大山職員、橋本職員、野上職員

### 5 開催形態

公開(マスコミ関係者:北海道通信社1名)

### 6 会議内容

#### 【配布資料】

資料1: 令和6年度第3回社会教育委員会議 次第

資料2: 令和6年度協議テーマ: 「地域学校協働活動を通した地域づくり」  
について

資料3: 座席表

#### (1) 出口議長挨拶

#### (2) 協議事項(事務局説明)

ア 事務局より、資料「令和6年度協議テーマ：地域学校協働活動を通じた地域づくりについて」を用いて説明（釜石係長）

＜熟議から見えてきた地域に与える効果として期待できること＞

- ①熱意をもった人が、活躍できる場
- ②子どもをキーワードに大人同士がつながる機会
- ③安全で安心できるやさしい地域の形成
- ④子どもたちの地域への愛着の育成
- ⑤チーム推進員を軸とした次世代の地域人材の育成

イ 熟議

今回も2グループに分かれて、熟議を行う。事前に事務局でグループを決定した。熟議の内容を各グループが発表し、全体で共有する（出口議長）

（ア）グループ構成

- ・ 出口議長、臼井委員、今泉委員、榊委員、小野寺委員
- ・ 片岡副議長、高原委員、松岡委員、小田島委員、安田委員

（イ）熟議テーマ

地域により一層の効果を及ぼすために、必要なアイデアや工夫を考える

⇒前半は委員がそれぞれの「地域に与える効果として期待できること」について自由にアイデアや工夫を出すこと。後半は出された具体的な取組を「5つの地域に与える効果として期待できること」に沿って整理し、まとめること。

（3）協議事項（熟議概要）

ア 出口議長班

- ・ ①～⑤の効果について思いつくままにアイデアを出し合い、そのあと全体をまとめたい。例えば③の「安全で安心できるやさしい地域」で言うと、みんなが挨拶し合うなど。効果が重なるアイデアもあると思う。（出口議長）
- ・ ②（大人同士がつながる）、地域学校協働活動の講師の中で、同じ特技をもった人同士のサークル活動のような集まりをもつことで、つながりを広げる。（出口議長）
- ・ ③（安全安心）で、地域にたくさん花を植えることで、防犯につながる。（臼井委員）
- ・ ①（大人が活躍）と⑤（地域人材の育成）で、校内で活動している各グループが交流することで、お互いの活動が見えるようになり、横の

つながりができる。（小野寺委員）

- ・地域学校協働活動と子ども食堂や地域子育て支援拠点の活動など、別の活動同士がつながるような仕組みをつくる。地域学校協働活動のみではできることにも限りがあるため、ネットワークをつくる。互いの活動を紹介し合うことで、熱意をもった大人がいろいろな活動に参加し、活躍する場が増えるのではないか。（榊委員）
- ・④（地域への愛着）で、親が朝早く仕事に出てしまい、朝ごはんを食べられない子や、生活のリズムを崩して不登校になってしまった子どもがいるため、スポンサーなどと協力して、週に1回でも朝ご飯給食活動のようなことをすると、隙間にいる子たちとのつながりができるのではないか。（今泉委員）
- ・④（地域への愛着）で、子どもたちの地域愛を育むためには、地域活性化のために一生懸命取り組んでいる大人の姿を見せたり、その活動の様子を話す場を設けたりすることが大事。（出口議長）
- ・大人が教えるだけでなく、子どもも教えられることがあると思う。（臼井委員）
- ・②（大人同士がつながる）か③（安全安心）で、SNS など、少しネット社会に居心地の悪さを感じている地域の方々に対して、子どもたちがスマホや PC の使い方を教えるという場をつくると、楽しい交流が生まれる。（榊委員）
- ・ICT の素晴らしい総合的な学習の時間になりそうだ。（今泉委員）
- ・垂直型に大人が子どもに教えるという関係ばかりではなく、逆に子どもから大人が教えてもらうことで循環的な関係ができると思う。（榊委員）
- ・⑤（地域人材の育成）につながると思うが、形骸化している P T A を人材育成という観点で考えてみると、地域全体で子どもを守り育てる大切さをみんなが共有し、その取組に興味関心をもってもらい、大事なことだと思ってもらえるようになれば、P T A の活動に多くの人が参加してくれるのではないか。（出口議長）
- ・③（安全安心）で、地域の大人が子どもを守る仕組みをつくる。子どもは「知らない人にはついて行くな」と言われているので、今のままだと誰が自分たちを守ってくれるのか分からない。例えば見回ってくれる人が分かる仕組みづくりとして、名札を付けたり、マークを付けたりする。（出口議長）
- ・腕章をつけるといいかもしれない。（小野寺委員）
- ・できるだけ多くの地域の人ができるような仕組みづくりがいい。（出

口議長)

- ・関連して、犬の散歩をしている方々に学校の腕章をつけてもらったり、あえて、登下校の時間に散歩をしてもらったりする。(小野寺委員)
- ・⑤(地域人材の育成)で、ジュニアリーダーや子ども会とも連携して、子どもの時代から興味関心が地域や子どもに向くようようにしていくと、自然とPTA活動にも目が向いたりするのではないか。(榊委員)
- ・最近ボーイスカウトもガールスカウトも数が縮小している。(出口議長)
- ・子ども会委員も数が縮小している。子ども会の楽しさをたくさん味わうと後に続いていくと思う。その子どもたちを育成する大人も必要だ。(榊委員)
- ・③(安全安心)や④(地域への愛着)などで、最近闇バイトなどの問題があるが、なぜすぐに簡単にやるのか、それは社会のカラクリを知らないから。例えば警察は何をやる場所なのか、銀行は何をしているのか、税務署とは何かなど、社会のカラクリを知る会をやるのはどうか。これだけ詐欺が横行するのは、やはり社会のことを知らないからだと感じる。(臼井委員)
- ・社会のことをよく知らない、未熟な子どもたちが捕まっているというニュースが多いと感じる。事前に知っていたり、キャッチできていたりしたらいいのにと、考えさせられる。(今泉委員)
- ・町内会活動など、ずっと関わらなければならないのなら負担だが、自分の興味のある活動であれば協力できるかもしれないので、この指しまれ方式のイベント開催にできるといいのではないか。(出口議長)
- ・少し話がずれるかもしれないが、学校のミニ児童会館がすし詰め状態というのが蔓延していて、子どもたちはずっと狭い中で過ごしている。意外と学校の先生たちもミニ児の先生方が何をしているのか知らないことがあり、同じ建物の中にいても連携がとれていない場合がある。推進員がリードしてミニ児の利用者向けにも活動に取り組めば教育的にも広がりがあるし、学校とミニ児の連携というところで地域とのつながりもできるのではないか。(今泉委員)
- ・もっと学校内が使えたらいい。体育館で遊ぶイベントなど、推進員が入れば、いろいろな取組が柔軟にできると感じる。(小野寺委員)
- ・③(安全安心)や④(地域への愛着)などで、百花繚乱とか玉石混交というか、子どもも参加して学校単位で地域のキャラクターを作る

のはどうだろう。（臼井委員）

- 大学もキャラクターを作っている。夏祭りや、キャンドルなど色々なイベントとコラボできる。（出口議長）
- ③（安全安心）で、学校では子どもたちを親が迎えに行く引き渡し訓練をしている。それを親子だけではなく、地域の人、近所の人と一緒に避難訓練的に一緒に登校したりするというイベントをする。（小野寺委員）
- 見守り隊が実施しているようなケースで。（出口議長）
- ③（安全安心）で、子ども 110 番のシールを貼ってある家があるが、実際に危ないときに、子どもはその家がどこにあるのか全然知らない。子ども 110 番の家との交流会があると利用し易くなるのではないか。（今泉委員）
- 何年か前に登録制にしたと聞いている。登録後もしっかりとフォローしていけば、地域や子どもたちに認知される。（出口議長）
- ③（安全安心）で、今、南海トラフ地震などの問題もあるので、地域の人達と、煮炊きをするなどの避難所体験と一緒に実施する。小学校や中学校の体育館で地域の人達がつながり、顔見知りになり、支援が必要な高齢者がいることを把握する。いつ起こるか分からない、いざというときのために避難所体験の練習は必要だ。（榊委員）
- 避難所訓練をすることで不便なことや足りないことが見えてくる。（臼井委員）
- 逃げ遅れてしまう方などに対する配慮を学ぶことによってやさしい地域の形成にもつながる。（榊委員）
- それを推進員の方がコーディネートできると素晴らしい取組になる。（今泉委員）
- はじめから全てをやるのではなく、計画を立てて、町内会などのいろいろなところとつながって、みんなで練習できるといい。（榊委員）
- 私が関わっている小樽の朝里中学校はコミュニティ・スクールで議論した結果、防災訓練を毎年やるようになった。今年度で3回目だが、自衛隊の人に協力してもらって炊き出しをするようになった。（出口議長）
- そういう炊き出しの体験も事前にしておくと、いざというときに動きやすいのかもしれない。（榊委員）
- もともと、炊き出しの釜が学校にあるのに誰も使ったことがないという話になり、使ってみないと分からないだろうということで、最初は自分たちで煮炊きして豚汁作った。そうしたら自衛隊が協力してく

れるという話を聞き、炊き出しの食べる方の体験をしようということになった。（出口議長）

- ・ いろいろな状況を想定した練習が必要だ。札幌気象台の人が防災や南海トラフの地震を想定してイーバック（『避難行動訓練 EVAG(イーバック)』）という体験をやった。やろうと思えば協力してくれるところは結構ある。（出口議長）
- ・ ノウハウを持っていらっしゃる方たちといかに地域の住人レベル、子どもレベル、町内会レベル、学校レベルでつながってネットワークをつくっていくかが大切だ。（榊委員）
- ・ 防災士というのがある。地域にもそういった資格をもっている方がいるかもしれない。防災士とのネットワークをつくることによって、防災訓練ができる。（出口議長）
- ・ 防災訓練とか、実際に自分で体験することは大きい。（榊委員）
- ・ 防災士を囲んだグループワークのような勉強会も地域でできそうだ。（榊委員）
- ・ 自分たちの地域の学校でやると、学校の施設に対する理解が深まる。実際に自分の学校をイメージして体験や訓練ができるとよい。（小野寺委員）
- ・ そういう教育を子どものころからできたらすごくいい。（今泉委員）
- ・ 子どもが小学生のとき、学校でお泊りをおこなった総合防災訓練があった。町内会の方や関係機関、消防団などたくさんの関係団体も参加していた。体験することが大事。そこからつながりもできる（小野寺委員）
- ・ ①（大人が活躍）で、子どもが卒業してもPTA活動の様子や参加についての情報発信があると、熱意のある推進員などにつながっていくのではないかな。熱意のある方々が卒業したら学校とのつながりがなくなるのはもったいない。（小野寺委員）
- ・ 実践しているところがある。PTCA（C＝コミュニティ）というが、子どもの数が減り、親だけでは人数が少ないため、なにも活動ができないので地域の人達に関わってもらおう。（出口議長）
- ・ ④（地域への愛着）で、「ふるさと愛」を育てるためには地域の良さを子どもたちに伝える必要がある。地域の人が講師になり、子どもたちにふるさと講座をするなど、総合的な学習の時間を積極的に活用する。（出口議長）
- ・ ③（安全安心）や④（地域への愛着）で、ひとり親世帯とか共働き世帯の中でショートステイのニーズがすごく高いが、まだ受け皿が少な

い。学校の中だけでもレスパイト里親の募集をし、登録できるといい。その学校の子ども達は夜9時までにお風呂入り、ご飯を食べ、宿題までやり終わった頃に親が迎えに来るといような感じになると、子どもたちにその地域の中の愛着育成のようなところにもつながっていくのかなと考えた。（今泉委員）

- ・レスパイト里親はどこでそのお子さんの面倒をみるのか。（榊委員）
- ・里親のお家で面倒を見る。学校から帰ってきたら今日は〇〇さんの家へ3時に行き、そこで過ごして親が迎えに来る。仕事が遅いといったときなどに割と昔は各家庭同士でしていたところもあると思う。安全面など、実現は難しいだろうが、学校単位で登録制度にできるとよい。（今泉委員）
- ・地域とつながりのある推進員を通して申込制とすれば、身元もはっきりしていて安全かもしれない。（今泉委員）
- ・一つの事例だが、離島の高校が生徒数減少に困り、全国公募で子どもを集めた。新設した寮に子どもが住んでいるが、地域の人達との交流がないため、里親制度をつくって必ず1週間に1回里親のところに行って交流するという仕組みを作っているところがある。（出口議長）
- ・子ども110番のさらに見守り強化型という感じか。（小野寺委員）
- ・ニーズはあるが、トラブルが絡むこともある。大変なお子さんだったりするときなどはハードルが高くなる。（今泉委員）
- ・ご高齢の夫婦2人だと、子どもに触れあいたいということもニーズとしてはある。（榊委員）
- ・そういう形にするのであれば、ここだったら安全に預かることができるというように、お子さんの年齢や性別などを限定して、当てはまるお子さんをマッチングするという作業が必要。（今泉委員）
- ・それを学校という地域の中でできたら、顔が見える関係ができ、よりいいと思う。（今泉委員）
- ・子どもと地域の方の関係性を深めることができれば、被虐待の子どもや、引越が多く、転々としている子どもが、ある一時期かもしれないが、地域で、かわいがってくれた人がいたな、この地域で親ではない大人がお世話をしてくれたという経験になると、④（地域への愛着）につながると感じた。（今泉委員）
- ・④（地域への愛着）で、大人のロールモデルに出会うことが大切ということだが、大学生に代わって地域住民が「カタリバ」をやる。（出口議長）
- ・「カタリバ」というのは大学生が高校生や中学生を相手に自分の人生

を語る。ここでこんな悩みがあり、それをどういうふうに克服していったのかなど。その大人版で、地域の人たちに自分の人生、職業というものを語ってもらい、それを聞いたうえで興味関心をもった人のところへ行って話を聞くという仕組み。「カタリバ」を通して、こういう人が地域にいるんだということが子どもたちにもわかり、話をした大人も中学生はこんなことを考えているんだということが分かって交流できる。（出口議長）

- ・②（大人同士がつながる）が①（大人が活躍）や⑤（人材育成）に循環できるとよい。そうすることで次世代の推進員へつなげることができる。
- ・①から⑤、全てがうまく循環するような仕組み、もしくはつながっていくような仕組みが必要。（榊委員）
- ・そうしなければ、どこかで止まってしまい、継続が難しくなる。（小野寺委員）
- ・それが地域学校協働本部の役割。（出口議長）
- ・地域全体で子どもたちを見守ることが大事。（小野寺委員）
- ・先ほど出た話題で、社会のからくりを知る機会が必要ということだが、その地域に住んでいる大人が行けたらいい。自分の町のことからより愛着をもって話してもらえる。（小野寺委員）
- ・避難訓練と登校下校の見守りをセットにして行事として地域に発信するのはどうか。（今泉委員）
- ・つなげていくことがミソという感じがした。それによって相乗効果が生まれ、点が線になり線が面になるという感じがする。（榊委員）

#### イ 片岡副議長班

- ・もっと大人が活躍できる場を実現するためには、町内会単位の小さなグループを活用していったほうがよい。（安田委員）
- ・学校と地域を見た時に、今一番必要なのは相互理解。「学校って頭固いよね」とよく地域の人に言われる。学校のほうも地域のほうから無理難題が来る。「何が困っている、何が必要」というためには、相互理解がまず必要。（松岡委員）
- ・相互理解を深めるためにはとにかく話をすることが重要。懇親会とか、小さい単位でも話す機会を多く設けることがまず重要。（高原委員）
- ・町内会の総会以外にも大人が集まる機会があればよい。総会は役員の人しか集まらない。大人が集まることは、防災対策にもなる。災害対策のためにもご近所の人を知る機会がほしい。何人かの方とは話をす



るが、班の皆さん同士ですら知らない方がいる。（小田島委員）

- ・ 小学校はユニットで地域ごとに登下校できるようなグループを作っているところが多いと思う。子どもたちだけでなく、そのユニットも保護者が知り合いになるような機会があると集まりやすい。学年を超えて知り合いになれる。（小田島委員）
- ・ 総合的な学習で、小・中学校で地域に関する学習をやっているので、地域の大人の方たちにももっと広く知ってもらいたい。（小田島委員）
- ・ 学校祭とか地域の人が学校に入れる学校もあれば、入れない学校や制限のある学校がある。昔の教室に行ってみたいとか、部活ここでやったとか、体育館に行っただけでも思い出すことが結構ある。成人式を見ていても、学生たちが集まり、そのあとご飯を食べて、すごく楽しそう。それを学校の場でやってみてもいいのではないかな。大学でも同窓生をもう一度呼び込んで、帰属意識を高めていくというのを考えている。（片岡副議長）
- ・ 外国人がたくさん在籍するとある大学で、学生が交通事故に遭うことがあり、大学が警察とタッグを組んで外国人向けの講習会を開いた。そういった学校の特徴をつかんだテーマで関係を深めていければいい。（片岡副議長）
- ・ 地域に根付いた NPO とか任意団体があると思う。私の地域でも私自身が子ども食堂の団体を率いており、すぐそばには子育て支援の NPO や、高齢者も巻き込んだ任意団体の子ども食堂をやっているところがある。団体はそれぞれボランティアを募り、子どもに対する熱意はともある。ただ、その 3 団体は交流がない状態。例えば、推進員の方が架け橋となって交流を図り、地域に根付いた団体、子どもをキーワードに大人たちが交流を図り、深くつながっていくことを目指すといいいのではないかな。（安田委員）
- ・ 地域と相對するのは学校の中では担任外とか、管理職である。授業づくりに関わって、担任一人一人が切実感をもって、総合でこういう人が必要になってきた、こういう材料が必要だ。だれか地域にいないかという思いを持っている。地域学校協働活動の活用など実際は、できることはいっぱいあるはずなのに、担任までおりてきていない現状がある。もっとこのへんを引き出すことが必要。私が現職のころは、担任の先生には「名刺を作って、地域を歩きなさい」ということをよく言った。（松岡委員）
- ・ 担任の先生もこの事業をそこまでご存じでない方もいるのではない

か。事業の認知度が少し低いと感じており、知ってもらうことがまず必要。認知度を向上させるためには、「こんなことをやっています」ということを地域に何か発表できる場があれば、それをきっかけに理解が深まり、加わってくれる人がいるかもしれない。先生も活用しようと思うこともあるかもしれない。（高原委員）

- ・コロナ前は企業を訪問しての職業体験をよくやっていたが、引き受けてもらえる企業が地域の中にあるのかどうか手探り状態であった。地域の人材とか、企業とかのデータベースを地域で協力してつくっておくと色々な場面で活用できる。（小田島委員）
- ・健全育成会で、PTAの方が「LINEとか活用でないですか」という話があった。学校ではできないし、そもそも学校には携帯電話がない。連絡方法が難しい。容易に連絡できる連絡方法が構築できればいい。（小田島委員）
- ・データベース化は大事だと思う。知恵の共有ができ、可視化されるといい。学校の財産となる。（片岡副議長）
- ・地域学校協働活動そのものが知られていないのが課題。子ども食堂の団体でも地域でお祭りをやったりしているが、小学校の先生とか中学校の先生が稀に来てつながっているところがある。私たちの団体も以前公園の許可を取って、出店をしてお祭りをしていた。子どもたちも保護者も地域の人遊びに来る。そういったところに例えば推進員の方がブースをつくるなどして「こんなことをしている」とPRできればよい。学校のような閉鎖的な所でやっても次の人材は育たない。周知するような何か動きが必要だと感じる。（安田委員）
- ・先生方は自分たちだけで頑張ってしまう。もっと地域に目を向ければいいと思うが、自分で抱え込んでしまう。もっと地域にヘルプを出してほしい。地域が学校のヘルプを受け止めてくれる素地があれば、そこから広がりが出ていく。現職の時から「もっと学校に大人を」と言っている。東京の板橋区で「大人千人プロジェクト」というのをやった学校があるので、大人をとにかく学校に引っ張り込もうというのが、今一番必要。PTAの方も頑張っているが、オヤジの会などの方が自由な発想で動くことによって、通学路に雪明りの雪で灯籠をつくるということができた。ここから発想していくと面白いことができると感じている。（松岡委員）
- ・学習支援は入り口としてやりやすい。大人が算数の分数の時間に一緒に考えるとか。学校や教科にもよると思うが。（片岡副議長）
- ・学校は時数があって、進度がある。やれるのは小学校であれば生活科

や総合。中学校ではキャリア教育の一環で職場訪問するとか、いろんな手立てはあると思う。教育課程外では日曜参観など。以前勤務していた学校で、冬休み、おやじの会が勉強の面倒を見る会をやっていた。教育課程内と外で工夫できることはあるはずだが、いざやるとなると、どう手立てをとるのか考えるのが難しいところ。（松岡委員）

- 教科にかかわることよりは総合の時間とか、特別活動の時間とかのほうがやりやすい。中学校は教科担任制のため、授業の入れ替わりもある。以前、スキー学習に地域のボランティアを募集してついていたことがあった。学校として地域の方が見えているとやりやすい（小田島委員）
- 小学校の時には教科として、家庭科を見守る会ということをやった。ミシンや調理実習など、面倒を見てくれる方を募集したことがある。（松岡委員）
- 先ほどの「学校にもっと大人を」という話題について、物理的な話もあるが、もっと意識的な話もあると感じている。保護者の多くが学校から距離を置き、対立構造になりがちで、「学校ってなんでちゃんとやっていないんですか」という目線になりがち。学校と同じ側から子どもたちを見ることができれば、そうした対立構造は起きないのではないか。そのきっかけとして学校の取組に参加すると自然とそういう目線になる。学校に対して意識が変われば有意義な学校目線の協力ができ、意識的にも変わってくると感じた。（高原委員）
- 大人と子どもが交流できる機会をつくるという話があったが、こういう活動は大抵大人が全てお膳立てして子どもに楽しんでもらうみたいなものになりがちである。企画から子どもが中心になってやっていると、子どもたちの地域への愛着、学校への愛着など、主体的な帰属意識みたいなものができると思う。まんべんなく子ども全体になると、どうしても強制的になってしまうが、それをどう主体性を促すか。子どもたちに主体性をもってやってもらえるような取組ができたらよい。（高原委員）
- 中学校の教員をしていた時に生徒会を担当していて、まだ若い学校だったが、学校祭で何か新しいことをしたいということになり、学校の玄関前でジンギスンを食べた。「なんでそういうことをするんだ」と、批判もあったが、今思っても良くやったと思う。大変な地域だったため、何か活気を与えたいという思いでやった。結果的には大変よかった。しかしながら、学校はそういったリスクをとるようなことを遠慮してしまう。そういう部分を保護者や大人が関わり、後押しをす

ることできれば面白い取組につながる。（片岡副議長）

- ・自分が中学生の時に、制服をなくしたいと生徒会として発議し、先生方と話し合い、制服をなくしたというのがあった。まさしく子どもたちがやりたいことを実現したもので、自発的にやって、やれたことによる充実感もあった。子どもたちの発信から、できることにつながればとてもよい機会となる。（小田島委員）
- ・不登校の子が私たちの団体を利用していたことがあった。小学校から不登校になり、修学旅行に行けず、中学校に入っても修学旅行に行けず、学校以外の場所というのが唯一私たちの団体の場所という状況。お泊り会をしたいという願いを、団体として何とか実現してあげたい。お金はどうしようかというところから、お金を集めるために、私たちが動画配信をして、予定していた額の倍以上の寄付が集まった。団体の事務所でのお泊り会に加え、修学旅行にも行けた。楽しんだ後に寄付してくれた方へお礼の配信を子どもたちがした。誘導していったのは私たち大人だが、子どもたちがすべてやって達成感を覚えた。サポートが必要なこともたくさんあるが、子どもたちがやろうとしていることに対してなるべく陰でサポートしながら、知恵を出していくということの大切さを私たちも学んだ。子どもたちが企画から全部入り、大人たちと対等の立場で物事を話していく。一緒に作り上げて、達成感を味わうということ大切にしている。（安田委員）
- ・子どもたちが主体となり、大人の力も借りるというのはとても大切なこと。次の時代になった際にあなた方にこうなってほしいというメッセージを伝えることができる。教育的な要素がとてもある（片岡副議長）
- ・今は SNS を使っていろいろな発信ができる。その辺は子どもたちのほうが長けている部分もある。（安田委員）
- ・今年度から札幌市においても子どもたちの自主的な活動をテーマに動き出しているところ。今年は小・中学校のパートナー校でどんな学校にしていきたいか話し合った後、秋に中学校の代表者だけ 1 カ所に集まり、そこに高校生をアドバイザーに入れて交流会をした。今年は初めてなので大人が仕掛けて生徒会でやった。今後そういった取組がどんどん広がってほしい。参加した子どもたちは、違う学校の色々なアイデアを面白がり、高校生が立派で、憧れの気持ちを持って帰っていった。その発表会を小・中学校の管理職が集まった研修会で、子どもたちが校長先生方の前で発表するという場もあり、すごく緊張しながらも立派だった。そういう機会をどんどん作っている。子どもたち

の主体的な取組につながればよい。（小田島委員）

- ・勉強する意味をもつのが難しい時期に、学生には頼れる人のデータベースをつくりなさいと言っている。頼れる人材を得るには関係性が大事。頼ったり、自分でやったり、大人を探したりというのをずっと続けていくことで、子どもたちが「自立した札幌人」になっていくのではないか。（片岡副議長）
- ・支援の場にいるとつくづく感じる。支援者というのは、やり過ぎてしまったり、前もって動いてしまうという部分があり、それがその人の力を奪っていく。考える力や、自分で頼れる人のデータベースをつくり、この時はこの人に頼ろうなどといった、つながっていく力を持たせないと、支援が上手くいかない。（安田委員）
- ・各学校でやっている活動の横のつながりが、もっとあってもいい。取組の相互視察など、枠組みとして常に交流ができるようになればお互いの取組も見えるようになる。（高原委員）
- ・認知度の向上というところで SNS とか動画アプリなどで取組の発信をしてもいい。熊本の P T A の情報交換会を拝見したが、校長先生が P T A 会長と二人で定期的に YouTube の発信をしており、保護者からのお悩み相談に二人で答えていた。P T A 活動もそうだが、何をやっているのかわからない。得体が知れないと思われているところがあるのかなと思っている。こういった取組が、活動の認知度を向上させるとともに、身近に感じてもらえるきっかけになるのではないか。（高原委員）
- ・大学でも地域の方から職員のところへ苦情のような電話がくるが、小学校も中学校もそういった電話が多いのではないか。（片岡副議長）
- ・それはむしろ、子どもに関心があり、子どもたちを見守ってくださっているからそういう連絡が来るのではないか。例えば、成績に関する質問が来るというのも関心があるから、見ているから来るのだと思う。地域で中学生があんなことした、こんなことをしたというのを見ているから、関心があるから連絡が来る。「荷物を持ってくれたんだ」とか、「中学生が雪かきしてくれた」とか、いいお話しの連絡も来る。子どもたちには「褒められたよ」と全校に伝えている。電話がくるということは地域がしっかりと見てくれている証拠。（小田島委員）
- ・学校や子どもたちのために何かできることがあればというスタンスの連絡があればさらにいい。学校に全部丸投げのような、「何とかしろ」のような感じではなく、自分もこれをやるから、学校もこれをや

ってくれれば。そういった関係ができればよい。（高原委員）

- 社会教育はこういう地道なつながりを濃くして、自分たちで問題を発見していくというのが戦後から続いていること。1個1個積み上げて、情報交流して、褒められて気持ちをよくしながら、できるといい。（片岡副議長）
- 札幌市は教育のキャラクターや、着ぐるみとはあるのか。なぜかという、大学は結構マスコットがいる。愛着という時に分かりやすい。キャラクターとか、そういう自分の帰属意識みたいなものを何かを通して得られるとよい。（片岡副議長）
- 以前、生徒会が公募して作っていたことがあった。生徒会がフェルトで人形を作って、新入生の学級に配っていた。（小田島委員）
- 地域の関係性の構築を政策に落とし込むのは、教育委員会も難しいのではないかな。ひとつひとつ地域の事情が違う。（片岡副議長）
- 本当に学校ごと、地域ごとに正解がない。むしろ全部正解ともいえる。同じ横並びでなくても全然いい。そのやり方を育んでもらい、トライアンドエラーでやっていただいてもいいというスタンスでやる。（小田島委員）
- 考え続けることが大事。ここで、紋切り型の、やり方が示されているからこうやればいいというのでは、だめになってしまう。（片岡副議長）
- 理想型はあるが、地域の方が色々なことをしてくださり、それぞれに特色がある。交流を通じて、自分たちの学校や地域でもできることがあれば取り組んでみる。（小田島委員）
- 共通項はある。推進員といった中心人物がキーになる。（松岡委員）
- 地域、学校それぞれのキーパーソンがいる。（高原委員）
- 交流会や、少しゆるい SNS のつながりなど、お互いに発信し合っていくことが必要。（松岡委員）
- よく何かをやるときに、だめな理由や、やれない理由はいっぱい出てくる。例えば餅つきなどで、地域の人がよくやりたがるが、学校で保管されている臼と杵よく見ると、何かかびのようなものが生えているので待ったをかける。そこで、子どもの口の中に入るものは、もっと気をつけなければならないと地域の人も、改めて気づく。学校の給食では、何かあったときのために、1食1食全部サンプルを取っているが、学校の外部の人はそれを知らない。これだけ気を遣っているのだということが周知されると、餅つき会やるのでも、お餅もっと小さくしたほうがいい、喉詰まり起こしたら大変だと分かってくる。こうい

うことをきっかけに、学校と地域の相互理解につながってくる。（松岡委員）

- ・事業をきっかけに、学校ではこんなことをやっているということができる。（高原委員）
- ・ある地区の例では、日曜参観などで、ゲストティーチャーたちが子どもと一緒に授業も一緒に受ける。授業の後に、子どもと一緒に給食も食べる。大人も当番になって給食の手伝いをする。そしていよいよ5時間目に、ゲストティーチャーとしてキャリア教育をやる。それはすごく面白い取組だと感じた。大人を呼ぶというだけで、学校は変わることができるのではないかと。（松岡委員）

#### ウ 各班からの発表

##### （ア）出口議長班

アイデアを出していく中で、①や③など、あるひとつの効果にだけつながるのではなく、複数の効果に絡んでいくことに気が付いた。

P T A活動について、子どもの数が減っているということは大人の数も減る、保護者の数が減るということではなかなか活動が十分にできない。ならば、P T Aにコミュニティを足し、地域住民にも関わってもらう取組をしてみたらいいのではないかという意見があった。

また、まちづくりの活動など町内会に入ると年間ずっとやらなければならないとなると、参加する人の負担になるため、この指とまれで興味関心のあるイベントだけに参加してもらう方法があるのではないかと。

大人同士がつながる場ということで同じ特技をもった人でサークル活動をやる。また、子どもが SNS について教えてくれる場をつくっていく。腕章をするなどの見守ってくれている人が分かる仕組みづくりという意見もあった。

地域の人達と一緒に避難所訓練をやる体験を設けたらどうか。それに関連して、防災士とのネットワークと関連付けたらどうか。子ども110 番の家の交流を積極的にしてはどうか。避難訓練と登校をセットにして行う。何かあったときに親が迎えに行く訓練はよく行われてるが、登校時に送っていくような訓練はしていない。それと避難訓練を一緒にしたらどうか。という意見。

また、地域の愛着と、やさしい地域を絡めて言うと、地域のキャラクターを作ったらどうなのか。それからレスパイトで学校が窓口になり、里親制度を作ったらどうかという話があった。

地域活動に取り組む大人と子どもたちとの交流、食べられない子ど

もたちのために、朝ごはん給食という活動はどうか。それからミニ児について、もっと広い活動場所を確保するとか放課後の活動を充実したらどうかという話があった。

また、社会のカラクリを知る勉強会をやってみたらどうか、闇バイトや詐欺の問題などもあるので、地域の人達の中には警察のOBもいるだろうから、そういう人が講師になって勉強の場を作ったらいいのではないか。

地域の人達に講師になってもらい地域の良さを子どもたちへ伝えるような講座、それを総合的な学習の時間にやることによって人材育成と愛着につながっていくのではないか。地域の大人がカタリバの講師になることによって人材育成と愛着につながるのではないか。

地域人材の育成ということで、保護者に子どもを守り育てることの大切さや、やりがいを感じてもらうための情報共有の場をもつことや、ジュニアリーダーなどが、どんどん少なくなっているため、子どもたちが育つプロセスを充実させ、活動をすることで地域のリーダーになってくれるのではないか。

まとめとして、子どもたちの活動に取り組んでいるいろいろな組織・団体をネットワークで結び、横の連携を作り、活動と一緒にいうことができるという仕組みが必要であり、一番大事なのは地域の人達を結びつける、団体と活動も結びつけるようなネットワークだということに落ち着いた。

#### (イ) 片岡副議長班

私たちのグループでも大人が学校に関わっていく、大人の存在感を示すという話が出ていた。そもそも、このような実践の認知度を高めることが重要であり、その時に SNS を使えばいいという話もあったが、予算の問題や安全性などハードルは高いということであった。けれども今、学校では欠席連絡も、昔はなかったメールを使うなど、少しずつ進化しているので、そこからまたバージョンアップができればいいと思う。

ただし基本的には、このような活動を担う人材探しについては暗中模索。関係を作りながら誰かいないか、紹介してくれないかなど毎日いろいろな人に聞いたりして、一つ一つデータを積み上げていくしかない。そういう意味ではデータバンクやデータベース的なものを作って、それを学内・校内で継承したり、地域でも言い伝えたりしていくことが重要だ。

それを、年一回しかない地域の総会で、参加している地域のいろい



ろな人のところを回って歩き、誰かいなか、どうですかというように関係を作っていくこと、積み上げていくことこそ核心があるのではないかという話が出ていた。

安全の話はもちろん出ていたが、中々これだ、という取組が見つげづらいのが社会教育の醍醐味でもあり魅力でもあると思う。そもそも社会教育とは、学ぶべきことが明確な学校教育とは違う、自分たちが民主的なプロセスを経て考えていくものであり、教育委員会が助言を与え、指導をしてはいけないという社会教育法の趣旨もそこにある。私たちが学んでいるようなことをホームページで発信はしているが、周りにいる大人たちが自分たちの住む地域や学校のためにいろいろなことを考え活動している姿を子どもたちにもう少し見せてあげるのもいいと思った。

時々、地域の方々から中学校に「生徒がカバンを持ってくれた」などのお褒めの言葉をいただく。地域の方々からの電話は、悪い話が多い。お宅の中学校の生徒は、あそこの公園でよからぬことをしているなど。それも含めて、人が人を育てるときにはいろいろなことがあるもので、子どもにもいろいろなことがある。今の地域学校協働活動のような経験をたくさん積ませることで、子どもたちが、いつか社会に出て大人になったときに、あの時はごめんよと言うかもしれないし、子どもたちが地域や学校のために何かしたいと行動してくれれば、自分たちの取組が意味をもったということだと思う。

地域にいる人々がどのように未来を拓くか分からないが、取組を積み上げ、人とのつながりを大切に前に進めていけばいいと思った。

#### (4) 連絡事項

今期の社会教育委員会議を本日で最後の出席となる小田島委員と高原委員より挨拶があった。

次回の会議について、第4回社会教育委員会議を3月14日(金)6階AB会議室にて開催。時間は10:00から12:00を予定。